

contents

第13回性科学セミナー報告	1
北丸雄二のニューヨークレポート⑨	6
「ありのままのわたしを生きる」ために⑨	7

今月のブックガイド	8
JASEインフォメーション	9

■第13回性科学セミナー報告

災害とジェンダー、セクシュアリティ

第13回性科学セミナーが、10月1日(土曜日)午後1時より東京慈恵会医科大学西新橋校大学1号館の3階講堂で開催された。今回の性科学セミナーは、3月11日の東日本大震災の経験と反省を踏まえ、「災害とジェンダー、セクシュアリティ」をテーマに特別講演ほか各専門分野からの講演が行われた。

冒頭、日本性科学連合の野末源一会長から、開会の挨拶とテーマの趣旨説明ののち、6名の講師が、それぞれご専門の立場から講演をされた。その概要を報告する。

震災復興にジェンダー・多様性の視点を

東日本大震災女性支援ネットワーク・女性の安全と健康のための支援教育センターの丹羽雅代氏は、「震災復興にジェンダー・多様性の視点を」というテーマで特別講演を行った。丹羽氏は、公立学校、養護学校などで教員として勤務の後、東京ウィメンズプラザ相談室に専門相談員として12年間勤務、その後、東京大学ハラスメント相談所の相談アドバイザーとして立ち上げから参加。現在は、複数の大学でハラスメント相談アドバイザーを務めている。

本年5月より東日本大震災女性支援ネットワークのメンバーとして、被災地に入っている。また、ボラン



野末源一日本性科学連合会長のあいさつ

ティア希望者に「ジェンダー、多様性の視点」などを内容とした研修を行うなどさまざまな活動をしておられる。

丹羽氏は、被災地の弱者の現状を紹介するとともに、避難所に宿泊したボランティアの声をもとに、いかに避難所の生活が劣悪な環境にあるかを次のように話された。



丹羽雅代氏

高さ1メートル30センチの間仕切りで区切られているが、とても仕切りとはいえず、プライバシーというものは全くない状態であるという。また更衣室としてテントが設営されているが、外から影が見えるような状態で、落ち着いて着替えができるようなものではなく、戻って毛布に潜って着替える状態であったなど、ボランティア学生の体験を紹介された。1週間程度でそこを離れる学生でもそれほど強いストレスを感じるのであるから、いつ避難所を離れることができるのかわからない被災者の皆さんのご苦労、ストレスの強さは、想像に難くない。

東日本大震災女性支援ネットワークでは、被災地の女性に対する「緊急避妊用ピル」の支給を含めた支援活動と並行して、さまざまな調査も行っている。調査によると、避難所の生活で、比較的安定して良好に運営されているのは、リーダーが女性主導の避難所であることがはっきりしたという。

その例として、女性の下着をどこに干すか、生理用品を誰からもらうか、ということひとつとっても、大きな違いがあるという実態を報告された。男性が品物の受け渡しを行っているところでは、中学生や高校生年代の若い女性が生理用品を手に入れるのにも大きなストレスを感じるという。

丹羽氏はレジメの中で、「現在は、復旧復興が掛け声となっている。しかしどこを目指す復興なのか、はっきりさせなくてはならない。女性たちや子どもたち、障がいもちつつ生きる人々、セクシュアル・マイノリティや外国籍の方々、確かに多様な人々がともにある私たちの社会という現実から出発し、生きやすい社会に向かおうという認識を共有することで、過去に戻るのではない復興を目指したい」と述べている。

「ジェンダー、多様性の視点」に立てば、避難所の女性リーダーの必要性はごく普通にわかるはずだが、残念ながらその認識がなかったという現実を再認識させられた特別講演であった。

震災における生と性を守る意味とは



渡會睦子氏

東京医療保健大学医療保健学部看護学科准教授・住民とともに活動する保健師の会の渡會睦子氏は、「震災における生と性を守る意味とは」と題し、東日本大震災における保健師の役割と活動について講演された。

渡會氏は、山形県保健所保健師勤務を経て、2009年より現職。この間「住民とともに活動する保健師の会」の設立に参加。「生きるための心の教育」でもある性教育のテキスト制作など幅広く性教育を推進しておられる。

渡會氏は、東日本大震災直後、仙台市役所と連絡を取りながら、3月16日に宮城県仙台市若林区に、子ども服700着などを自費購入しプロパンガス燃料のタクシー3台で支援に入り、18日から22日まで、保健師として避難所支援に加わっている。タクシーはメーターをあげずボランティアで運んでくれたという。その後、4月8日には、福島県に入るなど、精力的に支援活動を行ってきている。

被災地のマナーについて、渡會氏は、次のように語っている。

「過酷な状況下で多くのストレスを受けながら、町内会・青年団・消防団や行政の職員などはオーバーワークになっており、混乱状況の中での仕事のうまくいかなさに責任を感じたりしている姿も見られた。動くことのできる人材でできる保健活動を、涙も流す暇

も余裕もなく精一杯懸命に行っている現地の医療保健行政職員の気持ちもひしひしと伝わってきた。そのようななかで、これまで震災時から懸命に活動してきた者に意見するような外部の人間や、研究だけを目的とする者が入ってくることは負担につながることも目の当たりにした。意見を言うなら本人が動くのが被災地での鉄則である」と。

渡會氏は、さらに支援に入った被災地における東北人の心の強さ、優しさを語られた。被災地は、性の問題よりも、性別なく、暖を取る、食事を摂るなど生きるための行動が優先で、生きることに必死な状況にあり、まさに、「みんなの生>生>性」の状況であったという。

生と性の問題

▶ 被災地の状況はまさに

【みんなの生>生>性】

- ▶ 性の問題よりも、生きることに必死であった。
- ▶ 住居が避難所というプライバシーがまもられた環境ではないところであるため、**着替える場所や寝る環境の問題**はあったが、東北地方の現地ではまさに性別なく、**暖を取る、食事を摂る等の生きるための行動が優先で、生きることに必死な状況**にあった。
- ▶ レイプが多い等のうわさも東京ではあったらしいが、現地の医療保健従事者とは「**うわさに振り回されて支援に來ない方が大問題だ**」と話合った経過もあった。

“大震災” 地震・津波・原発事故とセクシュアルヘルス

村口きよ女性クリニックの村口喜代氏は、「“大震災” 地震・津波・原発事故とセクシュアルヘルス」と題し、震災現地からの報告をされた。

村口氏は、仙台市立病院産婦人科医長を経て、現在、仙台市内で外来専門の産婦人科クリニックを開いている。仙台市中心部から車で30分ほどのところにあるご自宅の約300メートル先まで津波が押し寄せたという。幸いクリニックも、ご自宅も大きな被害はなく、震災後は、非常に多忙な診療活動が続けておられる。

震災時、ご自宅の2階から仙台石油コンビナートの火災の炎が3日3晩見えており、爆発を恐れて1週間ほどはいつでも逃げられるよう洋服を着たまま休まれたという。

村口氏は、「被災地の妊娠・出産の状況」、「被災地における助産師の母子支援事業」、「被災地における性



村口喜代氏

被害について」の3点に焦点を当てて講演された。

「被災地の妊娠・出産の状況」については、3月12日未明から朝にかけて仙台市の病院で、停電のなか、4つの命が誕生したこと、高台にあり津波被害を免れた石巻赤十字病院産婦人科では、自然経膣分娩が急増したことなどを報告をされた。

「被災地における助産師の母子支援事業」では、宮城県助産師会の助産所への無料入院支援事業や財団法人ジョイセフの、被災された産婦に対する義援金支給などの事業を紹介した。

「被災地における性被害」については、阪神・淡路大震災ほどではないが、やはり性被害の報告が、少しずつ出てきていることを危惧された。

村口氏は、大震災の被害はあまりにも広域・甚大であり、収集できた情報も本当にわずかに過ぎず、セクシュアルヘルスにもたらした影響を論じることは、もう少し時間が必要と述べ講演を終えられた。

災害とジェンダー

東京歯科大学市川総合病院産婦人科の小川真里子氏は、「災害とジェンダー」をテーマに講演をされた。

小川氏は、市川総合病院で一般産婦人科外来に加え、リプロダクションセンターでの不妊症診療や「秋桜外来」（更年期外来）にも従事している。東日本大震災では、日本心身医学会心のケアチームの一員として福島県相馬市で支援活動を行っている。

女性は、災害の影響としてPTSDを発症する確率が高く、また、大うつ病や希死念慮を伴う気分障害も発症しやすいといわれている。災害後のホルモンバランス異常、月経異常なども多く報告されている。



小川真里子氏

小川氏は、東京医科大学市川総合病院の「秋桜外来」を受診した患者 44 名の「地震による体験が更年期障害に及ぼした影響」についての調査結果を報告された。調査によると、震災後の受診者に、くよくよする、意欲低下、ゆううつ、不安感などの精神神経症状が、高い頻度でみられたという。

東北地方から離れた千葉県においても 3・11 の震災は、女性の心に少なからず影響を及ぼしていることがわかった。東北地方においては、さらに今後、心の問題が重責化する可能性が大きいので、震災により心に傷を負った女性のケアを考える必要があり、その場合、性差医療的なものの見方が重要であると述べた。

はじめに 災害における影響の性差

- ・女性より男性に比して災害後に PTSD を発症する確率が高く、また大うつ病や希死念慮を伴う気分障害も発症しやすい
- ・災害後のホルモンバランス異常、月経障害など女性特有の問題もみられる

災害医療においても性差に視点を置いた診療が必要である

災害時におけるリプロダクティブヘルスの国際支援

社団法人日本家族計画協会の小長井春雄氏は、「災害時におけるリプロダクティブヘルスの国際支援」をテーマに講演された。小長井氏は、国際協力機構（JICA）の専門家として、北アフリカのチュニジアで、



小長井春雄氏

仏語圏アフリカ諸国のリプロダクティブヘルス担当医官や助産師を対象にしたリプロダクティブヘルスプログラム推進のための指導者養成研修を担ってきた経験をもつ。

小長井氏は、2008 年春、マレーシアで開催された国際家族計画連盟と国連人口基金による災害危機時のリプロダクティブヘルスの初動サービスに関する東東南アジアオセアニア地域国際会議に出席した経験をもっている。

同会議は、2004 年 12 月 26 日、20 万人以上が亡くなったインドネシア・スマトラ沖で発生した巨大地震におけるリプロダクティブヘルスの初動支援の評価を通じて、災害でのあるべき展開方法を議論するために開催されたものである。

小長井氏は、現在、国際機関や国際 NGO ではリプロダクティブヘルスの支援に際してどのような支援を行っているかスライドなどで紹介された。

人的支援では、①助産師、産科医などの派遣によるリプロダクティブヘルスサービス提供者支援、②女性や子ども、HIV 感染者などの弱者が援助を平等に受けられるようにする心理的社会的支援、③女性への暴力予防等対策支援。物的支援では、①リプロダクティブヘルスキット（避妊薬、医療用器具、出産介助器具、輸血キット）、②衛生（女性支援）キットの配布。物的支援キットの内容は、スマトラ沖地震の経験が生かされているという。被災した妊産婦に配布される衛生キットは、石けん、制汗剤、生理用ナプキン、下着、漂白剤、歯磨きセット、櫛、トイレットペーパー、シャンプー、プラスチック製カップと皿、スプーン、洗面器、ビニールシート、バケツなどで、国や地域の状況に応じて組み合わせて配布されるという。

災害時における女性へのリプロダクティブ・ヘルスの支援

- ① 初期支援サービスの提供
- ② 現状把握のためのモニタリングと評価、実施計画立案
- ③ 必要な保健・医療サービスの提供 実施地・実施者・支援者・物資
・出産支援・避妊薬の提供・HIV感染予防・人工妊娠中絶 etc.
- ④ 必要とされる情報提供と教育支援
- ⑤ 心のケアと持続的支援
- ⑥ 自立支援

人的支援

- ① 助産師・産科医等派遣
- ② 女性・子供・HIV感染者等弱者が
援助を平等に受けられるよう支援
- ③ 女性への暴力予防等対策支援

物的支援

- ① リプロダクティブ・ヘルス・キット他
医療用器具・出産介助器具・輸血キット
避妊薬・避妊器具等

ワクチンの基礎知識：災害と
性行為感染症に関連して

順天堂大学医学部総合診療科の内藤俊夫氏は、「ワクチンの基礎知識：災害と性行為感染症に関連して」と題し、講演された。

内藤氏は、2007年4月より順天堂大学医学部総合診療学講座の准教授を務めている。専



内藤俊夫氏

門はHIV感染症を中心とした感染症学である。内藤氏は、総合医療の専門医として、被災直後の3月16日から、日本プライマリ・ケア連合学会震災支援プロジェクト第1次先遣隊として、宮城県気仙沼市を中心に調査・支援を行っている。

講演の前半は、先遣隊として被災直後の医療関係者および医療の状況を報告された。現地の医療関係者は、被災者でもあり、たいへんな混乱状態にあったという。津波による犠牲者が多く、当初の医療活動の中心は遺体の検案で、未経験の医師も検案に当たっていたという。その後医療支援チームは、阪神・淡路大震災後の震災関連死で肺炎が多いという経験のもと、気仙沼市医師会会長と相談し、避難所の高齢者5,500人への肺炎球菌ワクチンの無料接種など、さまざまな医療支援活動を行っている。

医師の立場から、災害支援の医療者・ボランティアは、被災地に感染症を持ち込まないことが大前提で、そのために派遣前に必要なワクチン接種をし、体調が



不良な場合は活動を控える勇気をもつべきであると強調された。東日本大震災の災害派遣において、派遣者に接種が考慮されたワクチンとして、「破傷風トキソイド」、「A型肝炎ワクチン」、「麻疹ワクチン」をあげられた。

確かに、支援にあたる人たちは、多くの避難所をまわる可能性があり、避難生活で体力が落ちた被災者が感染する危険性があることに留意する必要がある。

講演の後半は、性行為感染症予防ワクチンについて話された。現在、性感染症予防に有効なワクチンは、子宮頸がん予防に有効な「パピローマウイルスワクチン」と「B型肝炎ワクチン」である。

内藤氏は、B型肝炎について、次のように述べた。

B型肝炎は、性行為感染症として認識されていないことが多いが、HIVと同様に血液・精液・膣分泌液で感染する。コンドームを使用しない性行為が最も代表的な感染経路であり、B型肝炎ウイルスはHIVの100倍以上の感染力をもっているが、ワクチンで予防できる。そのことを認識していない医療関係者も多いという。

「まずは、B型肝炎が性行為感染症だと認識することと、ワクチンで予防可能なことを周知させる必要がある」と訴えられた。

6人の講師の講演が終了した後、ぶれいす東京の池上千寿子氏を座長に総合討論が行われた。

※本セミナーの主催団体である日本性科学連合は、1996年に財団法人日本性教育協会、社団法人日本家族計画協会、日本思春期学会、日本性機能学会、日本性感染症学会、日本性科学会、2007年に財団法人性の健康医学財団の7団体が結束し、日本における性科学の啓発、定着を願って発足した学際領域による組織である。

LGBTニュースで振り返る2011年

2011年はアメリカでは軍の同性愛公言禁止規定が撤廃されたり NY 州で同性婚が合法化されたりしましたが、世界を見るとどうも二極化が進んでいるようです。日本ではあまり報道されてこなかった LGBT 関連のニュースで 2011 年を振り返ってみましょう。

- ▶ 1月4日 米空母艦長がゲイを揶揄したビデオを自作し艦内で放映していたとして解任に。LGBT への差別的言動で職を解かれることが欧米では一般的に。4月には NBA レーカーズのコービー・ブライアントが審判に対しゲイへの侮蔑語「Faggot」を発し罰金 10 万ドルの処分になるなどした。
- ▶ 1月26日 ウガンダのゲイ人権活動家デイビッド・カト氏が自宅で惨殺される。カト氏は「同性愛者を吊るせ」と呼びかけた地元紙の 1 面に顔写真を掲載されていた。同国ではゲイを死刑にできる法案の提出が国際的な非難の的になっている。
- ▶ 2月 ブラジルの LGBT 団体が同性愛嫌悪による殺人事件が増加中と発表。昨年度に確認された同性愛嫌悪の殺人は 250 件。平均 1.5 日に 1 人が殺害の計算。
- ▶ 2月11日 レディー・ガガが新曲「Born This Way」をリリース。「ゲイでもストレートでもバイでもレズビアンでもトランスジェンダーでも正しい生き方。こう生まれたのだから」と歌詞で LGBT を支援。
- ▶ 4月24日 日本の統一地方選で石川大我氏と石坂わたる氏がそれぞれ豊島区議、中野区議に当選。2人は日本初のゲイをカムアウトしている公選議員に。
- ▶ 4月 オランダ、世界初の同性婚施行から 10 年。統計局は、国内 5 万 5000 組の同性カップルのうち 10 年間で 1 万 4813 組が結婚、うち 7522 組が女性カップル、7291 組が男性カップルと発表。
- ▶ 5月 英国のゲイ団体が過去 10 年のゲイ映画トップ 5 を発表。1 位は『ミルク』、以下『キッズ・オールライト』『ブローックバック・マウンテン』『シングルマ

ン』『めぐりあう時間たち』

- ▶ 6月17日 国連人権理事会、LGBT への差別と暴力の排除を求める初の人権決議を 23 対 19（棄権 3）で可決。日本も賛成票。ロシアは反対。中国は棄権。
 - ▶ 6月24日 米ニューヨーク州上院が同性結婚を認める法案を賛成 33、反対 29 で可決。知事も署名し、7月24日から施行。経済効果は 300 億円とも。同性婚合法州はこれで全米で計 6 州に。
 - ▶ 8月24日 アップル社、スティーブ・ジョブズ CEO 引退に伴う後任にゲイ男性であるティム・クック氏を発表。
 - ▶ 9月18日 ニューヨーク州の 14 歳のゲイの少年ジェイミー・ロドマイヤーがいじめを苦に自殺。昨夏から頻発するゲイ青少年の自殺が米社会で大問題に。
 - ▶ 9月20日 オバマ大統領、同性愛者であることを公言して軍務に就くことを禁じた差別規定を撤廃。
 - ▶ 9月28日 「北朝鮮では同性愛者を公開で処刑することがわかった」と韓国メディア。罪状は「資本主義思想に染まった罪」。
 - ▶ 11月20日 2005 年に世界で 3 番目に同性婚を合法化した国スペインの総選挙で与党・社会労働党が大敗。保守の国民党政権の誕生で同性婚合法が見直される恐れで結婚を急ぐ同性カップルが急増中。
 - ▶ 11月29日 ナイジェリア上院で同性愛禁止法案可決。同性愛者はそれだけで最高で禁固 14 年、同性愛者の人権運動団体もその「幫助」で最高 10 年の禁固刑の恐れ。下院可決と大統領署名で成立へ。
 - ▶ 12月 ロシア・サンクトペテルブルク市議会、同性愛の公言、同性愛奨励の書物や記事の執筆を禁止する条例案審議中。国際的な反対署名運動が展開。
- さて来年は米大統領選挙もあります。性的少数者の人権問題は世界的に大きな政治課題でもあります。日本ではまだまだおおよけには議論にすらなっていないようです。「性教育とは人権教育なのだ」という気づきを、まずは広く共有したいものですね。

きたまるゆうじ ニューヨーク在住（18年）ジャーナリスト／作家／元・中日新聞（東京新聞）ニューヨーク支局長。

「ありのままのわたしを生きる」ために



第9回

「逃げ」の選択

土肥いつき

京都の公立高校教員。24 時間一人パレード状態の MtF トランスジェンダー。趣味の交流会運営で右往左往する日々を送っている。

最近、電車で長距離移動をすることがたまにあります。パソコンをはじめ、「必要か？」と思うものもとりあえず持って行くので、いつも重たいバッグをえっちらおっちら担いでいます。キャスターを使えばいいのですが、わたしはキャスターは苦手です。キャスターが自分の「オーラ」の外にはみでてしまい、そこまで神経が行き届かない気がしてこわいのです。

この「オーラ」、他にもいろんなことに感じます。例えば車の運転です。いちおう大きな車を持てはいるものの、運転するのはイヤです。大きな車も自分の「オーラ」の外側にはみでている気がするのです。不思議なことに、軽自動車やバイクは「オーラ」の中に入っている気がして、ちょっと安心します。

同じことを「自分自身」に感じることもあります。自分のできる／わかる範囲を超えた「自分」を感じた瞬間、「自分」が「自分のオーラ」の外側にはみでて「こわい」と感じます。でも、その瞬間の「こわさ」を忘れてはいけないなあ、いつも思っています。

閑話休題。

1980 年、わたしは高校と同じ系列の大学に進学しました。選んだのは電子工学でした。本当は天文学をしたかったのですが、地学の先生に「天文では飯が食えん」と言われたことと、なによりも学力が足りず、「次に行きたいのは」という選択でした。大学でも合唱を続けたかったのですが、工学部の勉強との両立はどうしてもできそうにありませんでした。そこで、電気研究会に入ることにしました。

電気研究会のボックスは、なんとも言えない雰囲気でした。当時、とても高価だった「マイコン（マイコンピュータ）」が、あたかも「あたりまえ」という感じでそこにあります。それどころか、どこから手に入れたのか、当時喫茶店でしか見られなかったテーブルタイプのブロック崩しのゲームが、基盤がむき出しになった状態で転がっています。どうやら先輩たちはそのテレビゲームを改造して、自分用のコンピュータをつくらうとしていたようです。

とんでもないレベルの差を感じながらも、わたしもプログラミングの勉強をはじめました。といっても、触っていたのは BASIC という簡単なプログラミング言語でした。後々のことを考えると、そのあたりがわたしの限界だったようです。それでも、学園祭では友だちと一緒にバイオリズムを印刷するプログラムをつくって、コストがただなのに 1 枚 200 円で売りつけるというあこぎなことをしていました。この時一番苦労したのは、実はプログラミングではなく、当時のプリンタの印字スピードが遅くて、印刷を待つ間お客さんと会話をもたせることだったことを覚えています。

一方、大学外にあった天皇制について考えるグループ（以下、「反天グループ」と略）にも出入りするようになりました。反天グループには基督教の牧師が数人かかわっており、父親もそのうちのひとりでした。父親の影響もあって、高校卒業直前にそのグループの会議にはじめて出席し、それ以来、なんとなくおもしろくて反天グループに居着いてしまいました。

ただ、反天グループを選んだ本当の理由は、もっと別のところにありました。当時、京都ではまだまだ自治会運動は盛んでした。でも、わたしは自治会活動はしませんでした。なぜなら、自分の父親が教員をしている大学で学生運動をすることに、なんともいえない自己矛盾を感じていたのです。また、反差別の運動も盛んでした。わたしは高校生の頃、教会を通して部落問題に触れる機会があり、関心はありました。でも、差別の問題からも逃げようと思いました。なぜなら、大学教員の家庭に育った部落外の日本人で健常者の男性であるわたしは、「加差別者」以外のなにものでもなく、そんな自分が差別問題にかかわることは、自分の存在を否定することにしかつながらなかったのです。そんなわたしにとって、天皇制の問題は自分を傷つけない「安全」なものだと、当時思ったのです。

そんな「逃げ」の選択ではあったものの、だんだん反天グループの活動がおもしろくなり、電気研究会からは少しずつ遠ざかっていきました。

BOOK GUIDE

今月のブックガイド

安易な病理化に警鐘

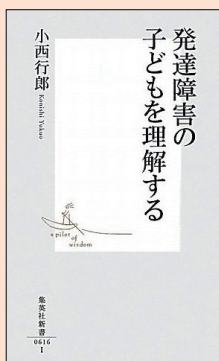
ここ数年やたらと「アスペルガー」とか「発達障害」という言葉を見聞きするようになった。メディアばかりでなく、日常会話のなかでも、「あの人、絶対アスペルガーなんだよ」とか「自分、子供の頃を振り返ってみると、アスペじゃないかと思うんです」といったふうに気軽に語られる。それは揶揄や差別的なニュアンスばかりでなく、他人や自身の不可解な行動の原因が解明されたかのような安心を伴っている場合もある。

本書『発達障害の子どもを理解する』は、急増しているといわれているアスペルガー症候群や自閉症の背景にある社会の側の変化に注視しつつ、現場から障害の概要を説明してくれる良書である。良書であることの理由は、それを語っている医学や医療者の限界についても謙虚に言及しているゆえだ。

著者の分類によると、発達障害というのは包括概念で、そのなかに自閉症やアスペルガー症候群、学習障害、注意欠陥多動性障害などが含まれる。自閉症には「言語の遅れ」「対人関係の質的な障害」「独特の物や場所、行為へのこだわり」の3つの能力障害がある。それに対してアスペルガー症候群は「知的発達の遅れを伴わず、かつ自閉症の特徴のうち言葉の発達の遅れを伴わない症状群」だという。

他の発達障害についてはここでは省略するが、それらは症状が重複していることが少なくなく、現れ方も単純ではないうえに、当事者が成長過程であることもあって変化をする。原因も、近年では育てられ方というより脳の障害によることがわかってきてはいるが、はっきりとはしていない。

そのように、発達障害についてはまだ科学的にも解明されておらず、定義も不明瞭なのに、診断数ばかり



発達障害の子どもを理解する

小西行郎著
集英社新書
756円（税込み）

が増加している。それは生物学的な原因というよりは、むしろ社会的な問題ではないか、と著者は疑問を呈す。育児観や教育方針の変化、医療の政策などによって、社会、もとい大人の側が、「子どもの発達に対する許容範囲を矮小化し、子どもが自分で社会性を育む場を奪いながら、『社会性のない子どもが増えた』と大騒ぎしているように見える」。もちろん著者は医療の専門家として生物学的な要因を無視しているわけではないが、安易な病理化に警鐘を鳴らしている。

こうした問題は発達障害ばかりではないだろう。ある疾病や障害の名付けが成立すると、多少の類似点だけでそこに強引に結びつけて考えられたり、当事者よりも周囲が先回りして「病気」に仕立て上げたりする傾向が生まれる。類型化、名称化によって、状態が認識しやすくなったり、自分の位置がとらえやすくなったりする一方で、それを過剰に実体視したり、安直にとらわれたりするようになるのだ。むかしだったら、少し変わってるけど面白い子、で済んだものが、「ちょっと気になる子ども」という表現で、ささいな行動を問題視し、障害に重ね合わせようとする短絡にもつながる。

著者が強調するのは、「発達障害の子どもを見て・聞いて・感じている世界を理解する立場に立つこと、それを互いの関係の出発点にしたいということ」。サポートする側は処方にも急ぐより、まずは、根気よく相手を理解することが肝要だという。そして、「子どもは『子ども集団』のなかで育つという当たり前の育児観に立ちかえるべきかもしれない」とも主張する。

本書は、病理化によって可能になることと、そこで生じる副作用の両面を見ていく必要を冷静に示してくれる点に好感がもてる。性急に診断を下すこと、治療することを欲しているのはいったい誰なのか。それこそが1つの病理なのかもしれない。

（作家・伏見憲明）

▶▶ 2012年1月21日(土) 13:00 ~ 16:30 ◀◀

HIV と性の教育セミナー（東京性教育研修セミナー） 「性の教育はこう変わる～ポスト『過激』のあらたな視点」

内 容 講演「第3次男女共同参画基本計画にみる『性教育の勧め』のポイント」池上千寿子（ぶれいす東京）
シンポジウム「教育と支援の現場から—新たな試みと課題」

- ①「これからの二人—高校生のデートDV教材自主制作から」田中喜代美（都立竹台高等学校養護教諭）
- ②「課題の克服にむけて—LGBT当事者の立場から」
- ③「HIV陽性者支援と企業での研修の経験から」大槻知子（ぶれいす東京）

ディスカッション（フロアとの交流）

会 場 財団法人日本性教育協会セミナー室（東京都文京区小石川2-3-23春日尚学ビルB1）

参加費・問い合わせ

参加費／1,000円。定員／30名（事前登録、先着順）。申込締切／2012年1月18日。
対 象／HIV／エイズ、性教育に関心のある方、保健師、助産師、教師、研究者、大学院生、学生等。
主 催：特定非営利活動法人ぶれいす東京 協 賛：財団法人日本性教育協会
問合せ先／E-mail info@ptokyo.com FAX 03-3361-8835

2012年
1月21日(土)～22日(日)

第13回自己効力感（セルフエフィカシー） を高め主体的な行動変容を支える健康教育 実践セミナー

【内 容】 講義「自分探しとエンパワーメント～自分自身の力を取り戻し、生き生きと輝くために～」
「主体的な行動変容とセルフエフィカシー～ライフスタイル修正のための新戦略（企画・実施・評価）～」
「新健康教育プログラムの展開」。講師：高村寿子（自治医科大学）、春山早苗（自治医科大学）、演習、セルフエフィカシー介入実習、ほか。

【会 場】 自治労第一会館（東京都千代田区）

【問い合わせ先等】

参加費／21,000円（税込み）。定員／80名。
対 象／行政、医療、産業、学校等の保健師、助産師、看護師、
医師、栄養士、養護教諭、看護教員、等。
問合せ先／（社）日本家族計画協会研修課
〒162-0843 東京都新宿区市谷田町1-10 保健会館新館
TEL 03-3269-4785 FAX 03-3267-2658

1/29(日)

9:15～16:40

人間発達と性を探る 第17回障害児・者 性教育セミナー in 堺

【内 容】

記念講演

「ライフサイクルを見通した障害児・者の性」永野佑子（障害児・者サークル代表）

分科会

「小・中・高～性教育の授業をつくる」

「小・中・高～学校・寄宿舎・放課後・家庭での生活の中で」

「青年・成人期～障害者本人と家族・支援者のために」

「青年・成人期～障害が重い人と家族・支援者のために」

【会 場】 堺市総合福祉会館 大研修室ほか
（大阪府堺市堺区南瓦町2-1）

【問い合わせ先等】

参加費／一般2,000円、会員1,500円、学生・家族・当事者1,000円。定員／150名。
問合せ先／「人間と性」教育研究協議会障害児・者サークル
「せいかつをゆたかに」実行委員会。
〒590-0078 大阪府堺市堺区南瓦町2-1
生活支援センター「しんしょうれん」 FAX 072-223-1430